

# 旭川医大病院ニュース

## 院長からの賀状

新年の諺を  
思つたことも

病院長 水戸 迪郎

明けましてお目出とうございませう。

元日の朝はすみきつた青空が天にひろがり、大雪山連峰の白銀が陽の光に美しく輝く日を迎えることができました。正に旭川医科大学附属病院の平成六年度

状況象徴するかのような年明けのように感じました。この感慨は一人私のみでなく、それぞれの職責を果たしてこられた職員の方々も抱いていただいたものと思

います。おだやかな天候は心をも豊かにしてくれます。

この心の豊かさはそれぞれの方々の仕事に対する満足感と職場から離れ円満な家庭にくつろいだ暖かさなどによってさらにふくらむ

ことでしよう。

一九九四年をテレビに流れる知恵院の日本一の大きさを誇る梵鐘の音を耳にしなが、振り返ってみま

したが、一年間、多くの事柄がわが大学病院であったのですが、思い起こすことは

すべて順調に推移した事ばかりで、嫌な思い出は無く、年越しの酒のなせるわざかと、ひと時、頭からアルコ

ールを追い出し冷静になつても、病院の運営・経営・看護婦充足・ICUの新設

など、どれを思い浮かべても、職員の方々の努力と協力ですべてが順調に動いてきました。最大の出来事と云えば昨

題字は吉岡元病院長  
[編集]  
旭川医科大学医学部附属  
病院広報誌編集委員会  
委員長  
飯塚教授(皮膚科)

認を受け、道北・道東の基幹病院として始動したこと

この承認に当たっては、今年辛亥年、猪の年、猪見て矢を矧ぐの諺のように

少々泥縄的な準備に追われた感が無きにもあらずでしたが、事務局の職員の方

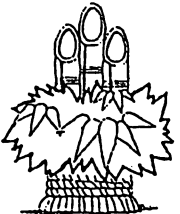
々の周到な計画と各診療科の協力の賜で事がはこびま

した。その上、医師会の諸先生およびマスコミの方々の理

解と協力などで、混乱なしに医療法の改正に基づく新

らたな医療体制へと舟出することができました。

ここに多くの方々の協力に対し深謝の意を改めて、表したいと思ひます。



病院としての要件と病院の経営状況などはすべて数字

の上での目標達成でありま

す。これは第一の目標であり最低要件をみたしたことに

なりませんが、満足感に何が残されていることも事実

です。それは病院職員の方各位がうすすにでも感じ

ていることかもしれません。一つの山を登りつめ下山

して感じる満足感から新たな目標を設定し、次ぎなる

登山を計画することに似ていると思ひます。次なる意欲をかきたてられることは

病院として承認され、近いうちに札医大も認められ三

病院となることでしょう。その三病院はいづれも大

学附属病院ですが同じ顔ではないはず

です。旭川医科大学附属病院の顔立ちとは問われたら、何

んと答えるか、すでに病院設立後二十年を経た今日

は、もうすでに成人です。自分の顔があるはず

です。猪も七代目には家になるの響えがあります。

変らないようでも長い年月の間には成長、変化する

意とか。すべての目標値がほぼ達成され、その継続行為の中

しい果実が収穫され、そしてその種が次の木を身生えさせて、特産品ができる時期

が到来したと信じています。初夢は富士、鷹、ナスビ

...を見るのと幸運がおとずれると云われますが、私の

初夢は旭川医科大学附属病院の特有の顔立を画くこと

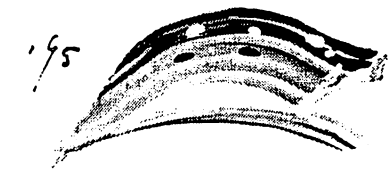
でした。お前は、未だ年越しと正月酒に酔っているの

で、目がぼけて、すである顔も見えないのか」と叱責の

声が聞こえるようです。その自負・プライドがあれば十分

です。いずれにしても、今年一年が猪突猛進ではなく、

じっくり旭川医科大学附属病院のさらなる前進に向けての充実しかつ着実な歩みを期待するものです。



第三内科長 高橋 裕

第二内科長 高橋 裕

消化器内科学と血液腫瘍学を二本柱とした教室作りをめざして



平成六年十二月十六日付で初代並木正義教授の後任として第三内科教室を担当することになりました。開講以来、並木名誉教授と教室員の皆様が培い全国屈指の評価を得た消化器内科の良き伝統を引き継ぐとともに、血液腫瘍学の幹もより大きく、これら二本柱を共に発展させた教室作りを目指したいと思っております。

私は、釧路市出身で、昭和四十九年に札幌医大を卒業、同大学院(がん研究内科専攻)を昭和五十四年に修了後、同医大第四内科助手、講師、助教として奉職してまいりました。その間昭和五十一年から二年半米国ニューヨーク市アルバ

ートアインスタイン医科大学、ボストン市タフツ大学医学部の生化学教室研究員として、各々アルコール医学、鉄結合蛋白質の分子生物学の研究に従事致しました。現在、消化器病学会および血液学会の指導医として両領域にまたがる悪性腫瘍の診断、治療を主たる専門としております。具体的には、悪性腫瘍の免疫化学療法・遺伝子療法・造血幹細胞移植を併用した超大量化学療法等の臨床応用を図るとともに、消化器、血液両分野の悪性腫瘍の病態解析・診断に新しい分子生物学的手段や物理化学的方法を積極的に導入しようとするものです。幸いに教室にはこれらの分野に意欲と情熱を持つ多くの英才が育ちつつあり、今後の展開を図る上で大きな力になるものと確信しています。「良き臨床家は良き研究者たりうる」との言葉をモットーに、日常の臨床を大事にし、そこから生じる素朴な疑問や

問題点の中から、今日的で将来性のある研究テーマを教室の皆さんとともに探っていく姿勢を忘れないようにしたいと念じています。今日の医療界を取り巻く社会情勢は厳しさを増し、人間性に富む質の高い臨床医が地域の医療に携わり、最新の医療技術を還元する必要性が従前にくらべ、より

永年勤続者表彰

勤労感謝の日を前にして、平成六年度の永年勤続者表彰式及び文部省永年勤続者表彰伝達式が、十一月二十二日(火)午後四時三十分から、事務局第一会議室で行われました。表彰式及び伝達式は部局長及び所属長の列席のもとに行われ、学長から被表彰者に対し表彰状並びに記念品の贈呈が行われました。

次いで、学長から永年にわたる本学の発展、充実に尽力されたことに対する、感謝とねぎらいのあいさつがあり、これに対して被表彰者を代表して生物学教授上口勇次郎氏から謝辞が述べられました。

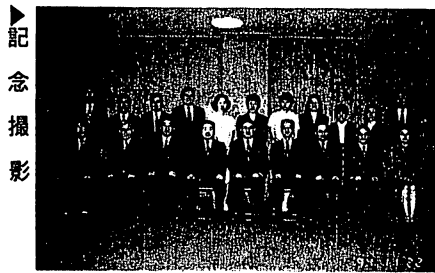
表彰式及び伝達式終了後、引き続き事務局第二会議室で祝賀会が行われ、永年にわたる思い出話に和やかな

り高まっていると認識してあります。第三内科の消化器病学とくに消化器内視鏡による癌の診断、内視鏡的治療の技術は全国の指導的レベルにあり、この維持・継承を念頭に置きつつ、より広範な臨床腫瘍学の展開を目標にしたいと思っております。皆様の御指導・御支援をお願いする次第です。

懇談のひととき

なお、被表彰者は次のとおりです。(敬称略)

- 本学永年勤続者
- 奥野 幸子 (生化学第二)
- 上口勇次郎 (生物学)
- 木谷 隆子 (放射性同位元素研究施設)
- 源長由美子 (物理学)
- 小澤 和永 (看護部)



記念撮影

- 小竹恵美子 (生理学第二)
- 阪井 裕子 (解剖学第二)
- 六戸 和幸 (医事課)
- 社本 忍 (会計課)
- 田中 邦雄 (実験実習機器センター)
- 東崎 真澄 (解剖学第二)
- 西岡 政信 (会計課)
- 長谷川清道 (施設課)
- 平塚 寿章 (細菌学)
- 藤田 晃三 (小児科学)
- 松本 真弓 (看護部)
- 宮川 清志 (実験実習機器センター)
- 村上 明範 (医事課)
- 渡辺 公稔 (学生課)
- 文部省永年勤続者
- 馬場 剛 (庶務課)



祝賀会



【薬剤部】  
新薬紹介(25)  
メシル酸ベルゴリド  
(ベルマックス錠)

パーキンソン病では、脳の中の主として黒質および黒質線条体ドパミンニューロンが変性、脱落するため、線条体のドパミン量が減少します。その結果ドパミン受容体を介した刺激伝達平衡が崩壊され、神経機構のバランスを崩すことから、振戦・固縮・暴動などパーキンソン病特有の症状が現れると考えられています。そこで薬物治療には、異なる作用機序を持つ薬物が幾つかありますが、その中心は脳で欠乏するドパミンの前駆物質である L-DOPA 製剤で、直接ドパミンを補い多くの症状を改善します。しかし、薬効の不安定性など問題も多くあります。特に長期投与において、薬効の持続時間が短縮する wearing-off 現象や、症状の改善の度合に對して激しい変動が起る On/off 現象などがみられます。これらの対策として、一つには頻回分割投与(一日六回まで)して L-DOPA の血中濃度を一定に保つことがあります。もう一つはドパミン受容体刺激薬の使用

であり、麦角アルカロイド製剤である本剤のメシル酸ベルゴリドはその一つであります。

ドパミン受容体刺激薬は、ドパミンを増やすのではなく、ドパミンを受けると受容体の活性を高め、その伝達を改善させるものであります。従来はメシル酸プロモクリプチン（パロドール）が唯一市販されてきました。本剤はプロモクリプチンを対照薬として二重盲検試験を行ない、その効果が検討され、ほぼ同程度の症状の改善がみられています。なお、L-DOPA 製剤との併用時にみられるwearing-off 現象などに対しては、プロモクリプチンより有意に優れた効果を示しております。一方、麦角アルカロイドにつきものの消化器症状がみられ、そのために少量からの漸増投与が必要であります。



即ち、初めに一日50mgを夕食後に投与し、二三日毎に50mgずつ漸増するという方法で、約三週間維持量の750〜250mgに到達します。効果はパーキンソン病の基本症状すべてに対して有

### 見えない光線

国民が放射線に不安、疑問を抱く原因はどこにあるかと考えるとき、一般に人々は放射線に対してある種の偏見をもっている場合が多いといえる。例えば、医療の場においても放射線といえは、広島・長崎の原爆、ビキニ環礁の原爆実験、その他原水爆実験による死の灰、被曝により発生する奇形児、白血病や癌など、各種の放射線障害や死亡といった悪い面、忌まわしい面のみが脳裏に強く印象づけられ、医療の原点から離れたことにより、事実と意識の間に大きな違い、不協和が生まれてくる。

マスコミは大衆にアピールするため、そうして発生した問題のマイナス面をキヤッチフレーズとして大きく取り上げ、プラス面は末梢的なこととして取り扱うのが常道である。このような状態にならされた国民の不安や疑問に答えるには、まず相手の質問に対して肯定的な立場で受け止めることである。即ち、質問に対する答えで、打ち消す必要があっても、肯定的な面から相手に理解を求めることである。「だが」、「しかし」といった論法は、相手を説き伏せることはできても、納得や理解をさせ

効ですが、その程度はL-DOPAほど強力ではなく、漸増投与のため二〜三週間経たないと効果が現われないうことにご注意する必要があります。

「本剤は通常、L-DOPA製剤と併用する。」と添付文書に記載されています。しかし、L-DOPAは先に述べたように、長期投与に伴う副作用などから、コントロールが難しく、一般的には可能な限り、使用開始は遅くするのが望まし

藤田 育志

るまでには至らない。自分の意図するところが、非常に素直な形で相手に受け入れられるという点に、話法の重要な背景があるものと考ええる。そして、その異なった人々に内容を理解させるには、教育の程度の差によるのではなく、いかに平易にわからせるかという理解のさせ方が重要である。

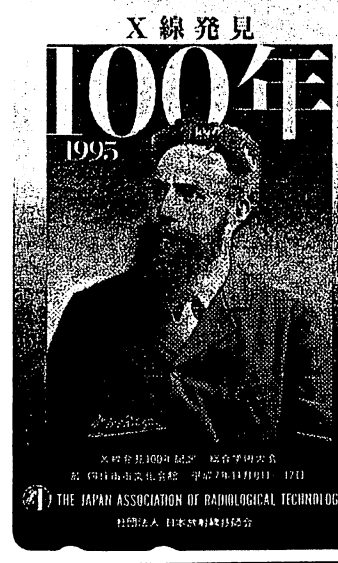
放射線技師は、診療の場において放射線を取り扱う上での専門家である。同時に放射線照射に際しては、常に患者・一般被検者と接触する職業人でもある。このような職業人が対人対話も十分に出来ないとすると、人から思わぬ疑念の目で見られるようになり、ついには疎外されるような事態ともなる。

一般に技術者の共通点として、口数が少ないという特徴があげられている。放射線技師が専門技術者であ

るところから、たまたまそのような共通点を持つかもしれないが、一方では、特に病人や心配ごとを抱えた人達を相手とする職業だけに、対話の必要性をもっと重視しなければならない。医療による放射線被曝が野放しの状態で、原発問題と並んで取り上げられているが、直接関係のある放射

線技師として問題をどの様に考えるか、また最近の「インフォームド・コンセント」とあいまって、放射線に不安と疑問を持って問いかけてくる国民・患者にいかに対応するかは、国民の医療不振を取り除く上でも大変重要な課題である。

（副技師長 西部茂美）



### 消防訓練が実施されました

平成六年十一月八日（火）午後二時から、本学附属病院にて消防訓練が実施されました。訓練は、本学防火管理規程に基づき、病院での火災発生時における人的、物的被害を最小限に止めるために、迅速かつ適切な通報連絡・初期消火及び避難誘導等の連携即応体制の強化を目的として本学自衛消

防隊を中心とした職員協力のもとに実施されました。今回は、九階東棟棟リネン室より火災が発生、看護士が発見、ただちに防災センターへ連絡するとともに患者（模擬）を避難させ、側近者、自衛消防隊とともに消火にあたるのと想定で、関係者への通報連絡訓練、初期消火訓練及び避難誘導

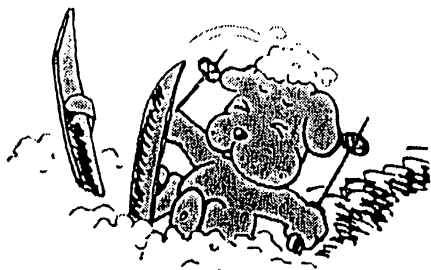


### 冬の散歩で思ふこと

大雪の稜線が輝き始めたころ、雪庇状になった提防の白い斜面を滑り降りる。一瞬、重力を感じなくなり、視界を失う。左右のスキーが交差し、片方のテールが雪の中につっかりと刺さり動かない。犬が胸の上に乗るかかり、はねまわる。顔の上の雪を払い深呼吸。スキーを掘り出し、右手にストック、左手に犬のロープを持ち、体勢をととのえる。膝下まで雪に埋まりながら、誰もいない美瑛川の河川敷を進む。雪の上に突き出た枯れ草が、踏み入れる隙間もなく繁っていた夏の様子も思い出させる。草も木もその細い枝の先まで丁寧に霧氷で化粧をしている。川霧の中に浮かぶ対岸の見本林は今のぼり始めたばかりの朝日をうけてかがやいて

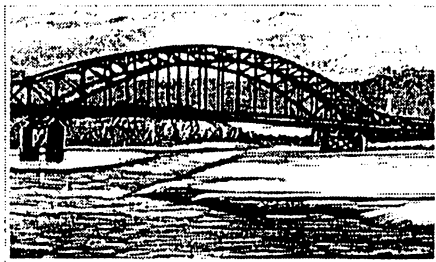
要であります。一連の訓練終了後、旭川南消防署予防係の指導のもとに初期消火のための消火器操作体験訓練を実施する予定でしたが悪天候により中止しました。最後に旭川南消防署予防係長の講評があり、最近の大型火災の実例から初期消火の大切さ、繰り返し訓練を行う事の大切さが強調され、

水戸病院長からは、今後なお一層防火体制を強化するための職員協力をお願いする旨の挨拶があり無事消防訓練を終了しました。(会計課 菅財係)



二年前に北海道犬を家族の一員に迎え、毎週末の朝、美瑛川の河川敷を散歩するのが習慣となった。季節により出会う人、草や木の風情は変化するが、特に冬の散歩が好きである。新雪のませながら、冬の創り出す景色を眺めていると、このような贅沢な生活をしていいのだろうか、といった大阪の生活と比較し、なんとも言い様のない不思議で不安な気分になる。どうしてこのような生活が出来るのか思案しながらスキーを滑らせる。今この環境が大阪にあったとしたら、たちまちのうちに提防に車が並び、河川敷は人であふれてしまうだろう。猫の額ほどの庭もない小さな家で週末になると息が詰まりそうになって外に出る。公園、水族館、デパート等いろいろ出かけてみるが、どこも人でいっぱい。結局はわが家が一番心休まると思ひ、疲れはてて帰ってくるが、翌週末には懲りもせずまた出かけてしまう。何故、駆り立てたのだろうか。どうも身の回りの空間の狭さが原因だったように思えてならない。空間が乏しいだけにいつそう空間を求めて動き回っていたような気がする。会話をする時

の距離、隣家とお互いに挨拶を交わしながらも干渉しあうことのない距離、くつろぎを感じる空間等、人が快適に生活を営んでいく上には適当な広さの空間が必要である。いま十分に文明の恩恵をうけつつ、街の中の住宅地から歩いてわずかのところで広い空間と輝く景色を楽しめるこのパランスの良さは、広い土地と程々の人口で支えられた旭川だからこそ備えることの出来た特徴だと思ふ。



本州から移り、新たに開かれた住宅地に住むわが身のことを思うと、なんと身勝手なことを考えるのかとあきれつつも、この街の人口がこれ以上増えることなく、周囲の雑木森が維持されることを願っている。(泌尿器科助教授 金子 茂男)

### 病院関係職員忘年会開催

病院関係職員の懇親を深めることを目的として、十二月十五日(木)午後五時三十分から病院職員食堂において「病院関係職員忘年会」を開催。医師・看護婦並びに中央診療部門や事務局から二〇名の職員の参加がありました。



この忘年会は一昨年初めて開催し今回で二回目になります。当日は、看護婦さんらによるたて笛の演奏や歌をはじめ本学女声コーラスによる合唱などが披露され、会場は予定時間をオーバーするほど華やいだ雰囲気でも盛り上がりつつありました。(庶務課調査係)